

地域に元気を与える「からくり屋台」に挑み続ける――

毎年10月中旬に行われる家山八幡宮の秋祭りに、からくり屋台が登場しています。人形を操る糸が見えず、まるで人形がひとりで動いているかのように見える「離れからくり」を制作しているのが鈴木明さんです。根気のいる作業をこつこつと続け、現在も県内に一つしかないからくり屋台を支えています。

【からくり屋台への挑戦】

勤務先の仲間とからくり屋台を作ることになったのが20年ほど前。制作担当者の鈴木さんが、からくり屋台の本場である飛騨高山に学びに行ったところ「からくりの仕組みは門外不出。見て考えて挑戦して」と言われたそうです。「大きな壁を感じた瞬間だったね」と振り返ります。それでも、鈴木さんたちは諦めませんでした。みんなで知恵を絞り、完成させたときの喜びは、今でも



忘れられない思い出になりました。県内初のからくり屋台を披露したとき、祭りの見物人からは大きな歓声があがったそうです。この体験が、後に地元の祭りに生かされるこ

が近づきました。「不況で重苦しい雰囲気にある地域を元気づける出し物をやりたい」と組の仲間と話し合う中で、鈴木さんは、今までの祭屋台をからくり屋台に作り替える



祭りを盛り上げるからくり屋台の制作者
鈴木明さん (川根町家山)

とになったのです。

【地元の屋台を作り替える】
秋祭りの当屋組（6年に一度の当番）が、鈴木さんの住む西向一番組に回ってくる年

ことを提案したのです。「本当にやれるかという不安の声もあつたけれど、『とにかくやってみよう』という意気込みで一つにまとまったんだ。今までとは違う新しい

ものを作り上げることで、まずは仲間内から元気を出したかったんだね」

近所の大工などみんなの技術を結集させて、設計から2年かけて屋台を制作しました。そして、平成14年の初回公演を成功させたのです。

現在は「布袋台」「野守太夫と赤牛の舞」「倒立親子太鼓」の3つの演目と、6体の人形に増えました。他にも、お囃子や屋台引きなど、幅広い世代が力を合わせ、からくり屋台を中心に、地域の祭りが盛り上がっています。

【新作の人形を作りたい】

今年、屋台をからくり屋台に改造してから3回（18年）目の当屋組です。「新作のからくり人形を作りたいとみんなが希望してね。仕事から帰って、毎日夜中まで作業をしているよ。間に合わせたよね。からくりには、何通りもの仕組みがあつて、いったん完成してもやり直すことが多い。でも、失敗が完成への近道だと思ふんだ」と力を込めて語ってくれました。



からくり屋台と仲間たち

Shimadian File #50

